

書評

山崎英樹 著

認知症ケアの知好楽

神経心理学からスピリチュアルケアまで

井原 裕

震災の瓦礫のなかから、知性の樹が育ち、大輪の花を咲かせた。本書の著者は、三陸大槌の港町で育ち、杜の都仙台で開業した。本書執筆の途上で東日本大震災に被災し、脱稿の直前にご尊父を亡くされた。鉄屑の山、漂う異臭、重い喪の作業のさなかに、予定通り本書を上梓された。届けられた作品は、介護の書を謳っているが、内実は神経心理学から福祉制度、医療倫理までをカバーした認知症学の包括書である。

かつて、ゲートは、「現実には詩的な興味が欠けているなどといっているといけない。というのは、まさに詩人たるものは、平凡な対象からも興味深い側面をつかみ出すくらいに豊富な精神の活動力を発揮してこそ詩人たるの価値があるのだから」（エッカーマン『ゲートとの対話』）と述べたが、本書はまさに臨床詩人の仕事である。人生の晩秋の風景に詩的な価値がないなどということはあり得ない。一見、不可解なお年寄の行動にも、神経心理学的な意味があり、生命倫理のラディカルな問いが潜んでいる。それを見逃さない精神の活動力にこそ、臨床詩人としての著者の面目躍如たるものがある。

本書の3つの章は、「知の章」は神経心理学、「好の章」は力動精神医学、「楽の章」は医療倫理と、位置づけ得る。題の「知好楽」とは、本書冒頭で引用された孔子の言葉の通り、知れば知るほど好きになり、好きになれば楽しくなるの意である。汲めどもつくせぬ著者の学識には圧倒されるが、むしろ、知識が豊かだからこそ、過酷な現実には屈しない強靱な意志を保ち得るのであろう。

学生時代の私にとって、著者は寮の先輩であった。十数年の歳月を経て再会したとき、著者はすで

に傑物医師となっていた。同業の後進として、著者の診療を垣間見る機会を持ったことは、至上の幸福であった。著者の格調高い診療録を読んで、精神科医の仕事とは何かを知った。本書の文体は、カルテの文体と同じであり、内容も日々の診療そのままである。症状の記述においても、行動の理解においても、末期医療の判断においても、著者の慧眼ははずば抜けていた。かくもハイレベルの記述を、著者は尿臭漂い、モニター音の続く老人病棟の片隅でカルテに残していたのであった。

美しいリアス式海岸に囲まれた大槌の風景が目には浮かぶ。浪板の入江には、今日も片寄せ波が静かに打ち寄せている。この夏も宮城野には萩が香り、広瀬川には朝鳥が啼いた。青葉もゆるみちのくの大地は、震災前と変わらない。いずれ、東北はよみがえる。認知症ケアも被災地の復興も、等しく「好く知ること」から始まる。知性ある行動はつねに強く、理想ある生命はつねに美しい。著者の流麗な文章には、過剰な熱意もなければ、ニヒルな諦念もない。実践の書でありながら、非合理的な精神主義がなく、理論の書でありながら、行間はユーモアに満ちている。本書の精神は、「悲観主義は気分であるが、楽観主義は意志である」とのアランの言葉(265頁)に集約される。学識に裏づけられた実践は、あまたの困難をも克服し得る。それが本書の持つ最大のメッセージであり、この言葉が被災者その人から発せられたことにこそ、本書の意義があろう。

(独協医科大学越谷病院こころの診療科教授)

●A5 288頁 2011 定価2,415円(本体2,300円+税) 雲母書房